

日吉台地下壕保存の会

会 報

第51号

発行 日吉台地下壕保存の会
編集 事務局(年会費)一口千円で、一口以上
郵便振込口座番号00250-2-74921
(加入者名)日吉台地下壕保存の会会計のお問い合わせ: 白鶴 邦子 港北区下田町1-4-14 045-563-3760
その他のお問い合わせ: 喜田美登里 港北区下田町2-1-33 045-562-0443第七回 川崎横浜
平和のための戦争展'99
私の街から戦争が見える

新井 英博

水野 次郎

須田 輪太郎

関崎 益男

特別展示

オレからの特攻隊

白井 厚

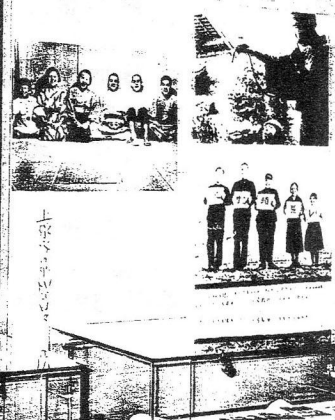
上原 清子

上原 清子

山室 勝司

江見 俊太郎

亀岡 教子



目 次

ページ

'99川崎・横浜

平和のための戦争展写真

同上 お礼と会計報告

同上 報告

戦跡ネット全国シンポジウム

(京都)に参加して

1

2

3

4-5

'99平和のための戦争展

かながわに参加して

「無言館」のこと

連載日吉台地下壕

当時の関係者の思い出話

運営委員会報告

日吉台地下壕の見学会について

6

6

7

7

8

8

1999年9月22日

賛同者の皆様

'99川崎・横浜平和のための戦争展～お礼と会計報告～

朝夕、秋が感じられるようになりました。皆様におかれましては、ご健勝でご活躍のこととお慶び申し上げます。

さる6月12～13日に行ないました標記の戦争展は、天候にも恵まれ、両日共に大勢の方々のご来場を頂き、無事終わることができました。ひとえにご賛同くださいました皆様方のお力添えの賜物と心よりお礼申し上げます。

新しい世紀へ向けて真の平和を願い、形ある大切な教材として戦争遺跡の保存現実を強く訴える活動をこれからも進めてまいりたいと思います。今後共、ご支援、ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。有難うございました。

'99川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会

代表 白井 厚

下記の通り会計報告いたします。

収入の部

前回繰越金	35,010
賛同金	188,520
カンパ	114,975
参加費・資料	28,500
雑収入	125
川崎市補助金	50,000

合計 417,130

支出の部

会場費	47,140
運営費	114,851
事務費	35,853
印刷費	29,105
事務通信費	38,405
交通費	31,640
謝礼	80,945
合計	377,939

差引 39,191円は次回繰越といたします。

'99川崎・横浜平和のための戦争展実行委員会

会計担当

白鶴 邦子 印

この報告により収支を監査したところ適正に処理されていることを認めます。

会計監査

喜田 美登里 印

'99 「川崎・横浜 平和のための 戦争展」報告

運営委員 亀岡 敦子

私も実行委員会は、「平和のための戦争展」を七年間にわたって開催してきました。その「△平和△とは？」を問い直そうとしたのが今回の戦争展。多摩丘陵を平和の視点で考える。簡単ですが報告をし、支えてくださっている会員の皆様へのお礼にかえさせていただきます。

一、プレイベント

五月二三日、会報四九号掲載「ピースロード」の地図にそって、日吉界隈を歩きました。大聖院、箕輪の森、艦政本部地下壕入口、金蔵寺と約三時間、新井、喜田が説明役となり歴史にひたりました。



二、展示（於川崎市平和館）

次の内容の展示をしました。

*日吉台地下壕・蟹ヶ谷通信隊地下壕・陸軍登戸研究所の写真パネル。

*八王子浅川地下壕の写真。
*日吉から蟹ヶ谷を結ぶピースロードに関する写真。
*特攻隊員上原良司の遺品の数々と写真。

三、講演（同平和館）

「戦争論」（小林よしのり）をのりこえる平和論。登戸研究所保存にかかわってと題して、法政二高の渡辺賢二氏が二時間にわたって講演され、実践を踏まえた内容に、聴衆は深い感銘をうけました。

四、シンポジウム（同平和館）
法政大学、和光大学などの学生による（若者の発表）には、六名の方の発言があり、心強く思いました。

（浅川地下壕保存を進める会）の日高忠臣氏の報告。

関崎益男、須田輪太郎、水野次郎、新井揆博の各氏による（ピースロード構想の現実

に向けて）は、聴衆と一緒に考えようとの観点にたち、身近な地域の新しい構想が具体的に語られました。

（戦争を語る）は、俳優の江見俊太郎氏。

（それぞれの特攻隊）は、江見、上原清子、上原登志江、山室勝司、白井厚氏により、思い入れも深く話し合われ、大変充実した内容になりました。

広く戦争遺跡の存在を知ってもらうために続けている「戦争展」ですが、人の輪も広がり、考え方も深まってきたように思われます。戦跡が保存され活用されるまでは、無理をしないで、くじけないで続ける事が大切だと、再認識した今年の戦争展でした。皆様の協力を中心に感謝申し上げます。

れても、戦跡の学術的な研究調査は行われて来なかったのではないかと思います。近代日本の歴史を学術的に正しく検証し、後世に伝えるためにもこうした調査、研究は欠かすことができないと思います。日吉台地下壕の調査、研究、保存運動はアジア太平洋という国際的な広がりの中の一部として存在するのだと感じたことでした。

会員総会：分科会終了後、国際平和ミュージアムにおいてシンポジウムのまとめ及び会員総会が行われました。総会の中の経過報告でこのシンポジウムに合わせて「戦争遺跡は語る」というブックレットをかもがわ出版から発刊したこと、文化庁による近代遺跡調査の実施に合わせ、都道府県の文化財担当者に対し要請文を送付したこと、文化庁に対し懇談の実施を打診しているが、まだ実現に至っていないことなどがあげられました。「戦争遺跡は語る」のブックレットは全国の戦争遺跡の所在、解説から戦争遺跡の調査・研究方法について書かれた全国の戦争遺跡の研究誌としてははじめての本で、是非各団体で活用して欲しいとのことでした。（価格1冊600円；団体で販売の際、1冊につき1割がネットに、1割が各団体に還元される。）

本年度の活動方針としては、文化庁との懇談・交渉を早期に実現し、「近代遺跡所在調査」の結果に対する情報収集、各自治体への保存の要請行動の実施、ブックレットの刊行に引き続き、各地方ごとの戦争遺跡の研究誌の発刊をめざすことなどがあげられ、役員として参加各団体から1名運営委員を出す方向で取り組むことが決められました。文化庁との懇談・交渉は早ければこの秋にも実現するかもしれないとのこと。その時は東京に近い日吉台地下壕保存の会としては、協力できるところは全面的にしていける必要があるかと思いました。役員には昨年に引き続き、代表として松代大本営保存の会から青木孝寿氏、文全協から十菱駿武氏の両氏、また日吉保存の会から谷藤が運営委員として、参加しています。微力ながら誠実に努めていきたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

最後に：来年度の全国シンポジウム予定地、高知県南国市より挨拶があり、三日間のシンポジウムは終了しました。南国市には、旧海軍の航空基地及び掩体壕があり、掩体壕を文化財に推進する会が中心となり、行政の後援を得て、全国シンポジウムを実施する予定とのことでした。この決定の前に、前日の全国ネット運営委員会でも十菱代表より、沖縄、京都と西日本での全国シンポ実施が続いていることでもあり、来年度は東京へのアクセスのいい神奈川で実施して欲しいという話がありました。突然のことでもあり、神奈川の参加者が集まって検討しましたが、積極的に神奈川で引き受けて実施しようという意見が出ず、来年度実施はお断りした経緯があります。しかし今後日吉台地下壕保存の会としても、全国シンポジウムを2001年の夏あたりには他の団体と共催できるよう運営委員会などで前向きにご検討いただく必要はあると思います。

まとめ：始めて全国シンポに参加させていただいて、ネットワークの広がりを感じたことと共に、日吉台地下壕保存の会の全国での位置、これからの活動の方向性が見えてきたような気がしました。全国の戦跡保存を目指す団体がネットワークをつくることで、これまで点だった活動が広がり、面となり、力となって国、各自治体などへの働きかけを強め、「負の遺産」をプラスの遺産にしていけるのではないかと思います。戦争の「語り部」たちが次々と少なくなっていく今日、聴き取り調査が引き続き急がれると共に、「人から物へ」と言われるように、戦争遺跡の保存の重要性は更に高まってきていると思います。

真夏の暑い中、全国から高齢の方々も含めて延べ300名、実質200名からの参加があり、シンポジウムは成功裏に終了したとのこと。この全国シンポはマスコミの関心も高く、NHK始め民放各局、新聞などの報道が相次いでいました。こうした全国シンポを神奈川でも行政の後援（できれば沖縄のように共催）で実施できれば日吉台地下壕の保存決定も早められるのではないかと思います。

以上

戦跡ネット全国シンポジウム（京都）

に参加して

日吉台地下壕保存の会運営委員 谷藤基夫

99年8月4日～6日京都立命館大学末川記念館及び国際平和ミュージアムに於いて第3回戦争遺跡保存全国シンポジウム（京都）が行われました。日吉台地下壕保存の会から6名が参加し、分科会発表などを行いましたのでご報告いたします。

戦跡ネット全国シンポジウムは第1回の松代、第2回の沖縄に続いて今年で3回目になり、日吉台地下壕保存の会は呼びかけ団体として当初からこれに加盟し、運営にも代表を送って参加しています。

プレ・イベント：4日午前中は宇治の火薬製造所（赤煉瓦建物群）午後は伏見の十六師団跡の見学会が行われました。宇治の火薬製造所は日清戦争遂行のため設立され、現在京都大学宇治キャンパスと自衛隊宇治駐屯地内に赤煉瓦の建物が残されています。京都大学内のもは解体の予定が地元保存の会などの働きかけで一時中止、解体の見直しとはなりましたが、保存について大学当局は予算がないとのことで消極的だとのことです。伏見の師団司令部は現在、短期大学の校舎として残されていますが、近くにある師団司令長官の建物が取り壊される計画ということで、地元の保存の会で保存を呼びかけています。この司令長官官舎は大正時代の和洋折衷建築の典型を示すもので歴代の司令長官には南京事件を指揮した中島今朝吾、柳条溝事件の石原莞爾などの高級将校が実際に住んだ歴史的にも貴重な建物です。伏見は軍都ともいわれた街で至る所に陸軍の遺構が残されていました。三十五度を越す猛暑にもかかわらず、百名近い人々が熱心に見学しました。

シンポジウム：5日午前中は立命館大学末川記念館において十菱駿武全国ネット代表より「戦争遺跡保存運動の到達点と課題」戦争遺跡に平和を学ぶ京都の会の足立恭子氏より「宇治火薬製造所赤煉瓦建築群（現京都大学）保存問題」などの報告、随筆家岡部伊都子さんの「未来はありますか」と題する記念講演などがありました。

十菱代表の報告によれば文化庁が1995年3月史跡・文化財の指定規準を拡大、改正、6月広島原爆ドームを国史跡にして以降、現在、戦争遺跡関連の指定文化財は国指定1件、市指定4件、町指定1件、村指定1件の計8件であり、川崎蟹ヶ谷地下壕、宇治火薬製造所、甲府四十九連隊糧秣庫、横浜日吉台地下壕など文化財指定、登録へ向けての（市民団体などの）動きはあるが、戦跡調査研究と保存公開運動への両面から史跡指定や有形文化財登録を促進していく必要があるということでした。

分科会：5日午後と6日午前の両日にわたり、分科会が行われ、日吉保存の会からは第1分科会に谷藤が「日吉台地下壕保存運動の現状と課題」第3分科会に亀岡、白鶴運営委員が「神奈川の戦跡保存と戦争展のあゆみ」二本の報告を行いました。また、会から新井、中谷、喜田運営委員が分科会の司会、進行を行い運営に協力しました。全分科会で計22本の報告があり、全国の保存運動の広がりを感じられました。報告の中にはたった一人で地下壕を調査している報告（滋賀琵琶湖畔）もありましたが、山梨や沖縄のネットワークの運動のように行政やマスコミを巻き込んで県全体のレベルで活動している先進的報告もありました。現在山梨、沖縄、長野三県で県レベルのネットワーク運動が行われているとのことです。戦争遺跡の集中する神奈川でも早急にネットワークをつくる必要性を感じたことでした。

また報告の中で最近中国虎頭要塞（旧日本軍ソ満国境要塞）の日中共同調査に見られるように日本国内だけでなく海外にまで戦争遺跡の調査研究を進めていく必要があるという指摘がありました。一口にアジア太平洋戦争といわれるように近代日本の戦争遺跡はアジア太平洋全体（陸上ばかりでなく、海中）に広がっています。これまで遺骨の収集、慰霊、墓参などは行わ

99 平和のための

戦争展かながわ

に参加して

今年も標記の戦争展が会場を神奈川県民ホールギヤラリに移して、八月二三日から二九日まで行なわれた。保存の会からは佐相運営委員が実行委員として出席していたが、生憎期間中都合がつかなく、代って喜田運営委員を中心に数人で搬入・展示・搬出に当たり、無事参加することができた。広い会場一杯にそれぞれのグループが趣向をこらし、なかなか見応えのある展示であった。「君が代・国旗」の法案が国会を通過した勢いかってか、右翼団体が会場にマイクを持ち込み大声を出すなど緊迫した場面もあった。一般市民の平和を願う戦争展を乱されてはならないと思った。

「無言館」のこと

八月はじめ、友人たちを誘って無言館へいった。もう三

敬老の日のお祝いを兼ねて、母と一緒に、長野県上田市郊外の「無言館」を訪れた。浅間山や千曲川

の見える美しい山麓(さんろく)に僧院のような建物があり、太平洋戦争の戦没画学生作品や遺品が展示されている。館長の窪島誠一郎氏が全国の遺族から絵画などを集め、寄付を募って建てた民間の慰霊美術館である。

あすの話題



応召の日まで黙々とキャンバスに向かった人。兵を送る人々が家の外ではんさいを唱えているなか、「あと五分、あと十分、画かせてください」と恋人の姿を描き続けた人。父親には「お国のために立派に戦います」と告げ、母親の耳元で「ほんとうは行きたくな

い。ずっと画を続けたい」とささやいた人。声高な文章や言葉とはまた違った、まさに「無言」の迫力が、絵画や遺品にはある。肉親や妻にあてた手紙を読んでいると、涙で字が霞(かす)んでくる。画も文章も遺せなかった何百万人の、国内は、「前から来たかった。やはり

度目になるが来る度に思いが新たになり、目の中が熱くなる。九月のお彼岸に無言館の記事を見つけた。機会があっ

たら是非訪れていただきたく、そっくり掲載することとした。中沢 正子記

「無言館」からの叫び

米沢 富美子

外での戦争犠牲者に思いが至る。館内には、すすり泣きも聞こえ、厳肅な雰囲気漂う。

私の父が戦病死したニューギニアだけでも、十数万人の兵が投入されたが、戦況の悪化と共に食糧や武器の補給も絶たれて病死、餓死、凍死が相次ぎ、結局生き残ったのは一万余人という惨状であっ

た。他の場所でも似たり寄ったりの状況だったという。無謀な戦いに、あたら命を散らさねばならなかった若者たちの、無念の叫びが、「無言館」の絵画の向こうから聞こえてくる。来館者の感想を書くノートにも、「前から来たかった。やはり来てよかった」「家族三人、今日ここに来ました」「館長さん、無言館を大切に守ってください」と、そのひとつひとつが感動に満ちている。戦争の実像を若い世代に語り継ぐことのむづかしさに、めげそうになっていた私の心にも灯りがともった。それぞれの形で語り部を誦(あきら)めないで続ける、それしかないのだ。

(慶応大学教授)

連載

日吉台地下壕

当時の関係者の

思い出話 29

ミッドウェー海戦

増井 潔氏の話

(ききて・寺田貞治)

日本が負けると感じたのはミッドウェー海戦の敗北後である。ミッドウェー作戦は

「機動部隊がミッドウェー島に空襲をかけ、敵艦隊がでてきたところを絶滅する。ついでミッドウェーの施設を破壊し、陸戦隊が上陸し、橋頭堡を造る。一方陸軍部隊が南下してサモア・フィジーなどを經由して、ミッドウェーに向い、陸戦隊と交代した後、機動部隊はサモア・フィジーで訓練し、ハワイ攻略をする」予定であった。

機動部隊が豊後水道を出発した時、既に敵の潜水艦が見破り「大艦隊が東に向ってい

る」と緊急信を発していた。

また日本側の暗号は全て解読され、ミッドウェー海域には空母ヨークタウンやエンタープライズが待ち構えていた。

昭和十七年六月四日午前四時、ミッドウェー島を攻撃した友永指揮官から「第二次攻撃の要あり」と電報が届いた。ついで四時二〇分「敵は後方に空母らしきものを伴う」と偵察機からの電報が届いた。ここで飛行機に陸上攻撃用爆弾を積むか、艦船攻撃用爆弾を積むかで、南雲長官と草鹿参謀長の間で意見が食い違い、貴重な時間を費やしてしまった。

結局、長官命令で積んでいた陸上攻撃用爆弾を艦船攻撃用爆弾に積みかえ、いよいよ発進というところに、敵の爆撃機の攻撃を受け、加賀・蒼龍・赤城・飛龍など空母四隻が沈没し、ミッドウェー作戦は大敗北に終わった。

私の乗った愛宕はミッドウ

エー作戦時、上陸部隊支援任務のため第一線より後方にいた。艦長はいつも葉巻をくわえ、艦長室には洋酒が並んでいた。戦闘中は飛行帽をかぶり、自ら陣頭にたって号令するいい艦長であった。私の任務は戦闘記録を部下に命じて書かせるものであった。

愛宕はミッドウェー作戦が計画と違ってきたので「引き返せ」という命令を受け、日本に帰った。途中、敵の攻撃を受けた。神風特攻隊は米国では考えられないと思っていたが、それに劣らず米国の軍人も実に勇敢であった。一斉砲火の中をかくぐって急降下してきた。

一七年八月愛宕は金剛・榛名などの戦艦とトラック島からガダルカナルへ行き、日本軍を無事撤退させるための艦砲射撃をおこなった。

戦後、ガダルカナル・ダイ

アリーに「日本の艦砲にはこたえた」と記載があることを知った。

私は一六年三月慶大経済学部を卒業し、三井物産に入社。穀物・油脂を扱う仕事をしていて、満州や中国から油の原料になる胡麻・落花生を輸入し、日本の会社渡しで油を作らせていた。また、軍からの注文でヒマシ油・亜麻仁油・桐油・ヤシ油などを軍需物資として取扱った。ヒマシ油は飛行機の潤滑油として必需品であり、ヒマの種を南米・中近東から輸入した。亜麻仁油は塗料の溶剤に、桐油はカキがつかないように船の吃水線の下に塗るために、ヤシ油は食用その他に使われた。このように軍需物資を取扱っていたため、陸海軍にはよく出入りしていた。

(生協ニュース教職員版第四三号より抜粋転載)

報生口

員会（慶應高校物理教室）

お問い合わせは喜田まで